〔芦高版春曙抄〕

——芦屋高校校歌讃——

丸島久仁夫君への手紙

第5期生　上田　雄

丸島久仁夫君（放送部OB・38回生）お元気ですか。

私が芦高を去った時、君はまだ2年生になりたてでしたが、あれから9年、もう立派な社会人として活躍しておられることと思います。

私が転任する時、名ばかりの顧問をしていた放送部の諸君から心のこもったいろいろな贈物を頂き、大変感激しましたが、それに添えてくれていた部員一人一人の寄せ書きも心にしみるものでした。

その寄せ書きの中で、当時部長になったばかりの君が書いてくれていた次の言葉は特に印象的でした。

『先生の大声でうたう校歌が忘れらません。』

私はこれを読んだ時、「してやったり、よくぞ見ていて下さった」と思い、「私には校歌を大声で歌う理由があるんです」とつぶやいたことでした。

当時の私は生徒指導部長ということで、学校集会の時にはいつも朝礼台の傍に立って、生徒とじかに対面していましたが、校歌を歌う時には意識的に生徒に見せつけるように大声をはりあげていたものです。そして君は代議員だったのでしょうか、いつもクラスの列の先頭にいましたから、そういう私の姿がよく目に映ったのでしょう。

そこで今日は、9年もたってはいますが、あらためて私が校歌を大声で歌う理由を、君への手紙という形に託して、すべての芦高の後輩や芦高生に語りかけてみたいと思います。

“なぜ、私が芦高の校歌を大声で歌うのか”

その理由は、まず私が旧制の芦屋中学校から新制に切り換った芦屋高校までの6年間も過ごした卒業生であり、その上、人生の後半の16年間、その母校の教壇に立っていたという、誰よりも芦高と密着した人生経歴による、といえばそれまでですが、それ以上に私には「芦高の校歌は私がつくったようなものだ」という思い入れがあるのです。

勿論、芦高の校歌は、昭和21年当時の浅生孝之助（国語）岡本仁（社会）両先生の共同作詩に池尻景順先生（音楽）が作曲されたものであり、私がつくった訳ではありません。

しかし『春曙の打出浜……』にはじまるあの校歌は、昭和21年3月16日に開かれた第1回校内弁論大会に飛び入りで参加した私が「校歌をつくろう」と弁論したのが契機になってできたことは確かなのです。

私が弁論大会に、しかも飛び入りで出場した理由はあまり恰好のよい話ではないのですが、簡単に説明しますと、当時は戦後の大混乱時代で、学校は再開されたものの先生方の数が揃わず、そのための窮余の方策として、社会の岡本仁先生が、私たちには英語もかけもちで教えられるという状況でした。

社会は得意であったものの、英語はサッパリとい

う私は、学年末試験最終日の英語の試験が全くできず、ひょっとすると落第するかも知れないという不安に駆られていました。そこで成績の悪いことでは人後に落ちず、同じように落第の危機におののいていた級友美濃村曄夫君を誘って、その日開催される弁論大会に飛び入り出場することを岡本先生に申し込みに行ったのです。

そのねらいは、弁論部創設を目論んで、弁論大会を企画したものの、自主的な参加者がいないと嘆いておられた岡本先生の歓心をかって、英語の点を助けてもらおう、という子供らしい発想からでした。

――という訳で、校歌がつくられるようになった契機(きっかけ)はまことに恥ずかしい、次元の低いことなのですが、フランスの哲人アランも言っているように、どんなに大きな事件やできごとでも、その原因をつきとめてみると、意外にも小さな、つまらないことであることが多いのであり、また日本の諺(ことわざ)にもあるように"終りよければすべてよし"だと思って下さい。――

それはともかくとして、その時、借校舎の本山第一小学校の寒々とした講堂で、中学2年生だった私は「仮校舎を空襲で焼かれ、あちこちの借校舎を転々とし、机、椅子さえない、ないないづくしの私たちの学校だけれでも、未来に希望をもって学校をつくっていくために、せめて皆で一緒に大声で歌える校歌をつくろうではないか」と僅か2分ほどの弁論に汗をかきながら夢中でしゃべったのでした。

頭の中で考えていたことを、ともかくも言い終えて降壇する私に、さかんな拍手が浴びせられましたが、なかでも岡本先生が満面に笑みをたたえて拍手して下さった姿は今も目に浮かびます。

「してやったり!!」――しかしその時の私には、これで落第は免れるだろうという安堵感だけがいっぱいで、まさかこれが契機となって、本当に校歌がつくられるなどとは思いも寄りませんでした。

ところが、この私の飛入り演説が、岡本先生によほど気に入られたとみえて、その後すぐ先生の提案で、校内に職員、生徒から代表を選んで、「校歌制定委員会」が設けられ、ただちに校歌の歌詞が職員生徒から公募されることになりました。

演説はしたものの、まだ子供だった私はその段階になると、何もできることはなく、事態の推移を見守るだけでしたが、やがて私たちの級友の作品を含めて、7～8点ぐらいの応募歌詞が集まり、全校にそれが公示され、5月下旬にはそのうちのいずれを校歌とするかという、全校の職員、生徒による投票が行なわれました。

そういえば簡単なようですが、当時の学校は、芦屋青年学校、本山第一小、第二小の三ケ所に分かれての仮住いで、おまけに芦屋青年学校では午前、午後の二部授業という状況、それに戦後のどん底時代でしたから紙が徹底的になかったという時、だから各校舎間の連絡や、候補作品のガリ版刷りや投票用紙にさえ先生方はずい分苦労されたことでした。

そして投票の結果、校歌制定に一番熱心だった岡本先生が浅生孝之助先生に助言を得ながら作詞された『春曙の打出浜……』の歌詞が最高得票数を得て当選、早速、作曲が専門であった池尻景順先生に作曲が委嘱され、それが完成して本決まりとなり、昭和21年7月15日、借校舎の本山第二小学校の講堂でヴァィオリンの辻久子を招いての「校歌制定記念音楽会」が開かれたのでした。

――私が弁論大会で口火を切ってから制定まで、僅か4ケ月という考えられないような早さでした――

こうして芦高（但し当時は芦中）の校歌はできたのですが、その直後から、なぜか野球部がめきめき強くなり、夏の大会、春の選抜に連続して甲子園（但し最初は西宮球場での夏の大会）に出場していったので、その応援を通じて、できたての校歌は急速に私たちのものとなっていき、その歌詞と曲とは校舎なき芦高生の心のふるさととなっていったのです。

いつだったか、作曲者の池尻先生が「作曲した当時は、何度聞いてみてもどうもうまくない、駄作だったと恥ずかしく思っていたが、甲子園で演奏されるのを聞いてみると、自分でいうのもおかしいが、うむ、なかなかいい曲だ、俺の傑作だ、と思うようになった」という意味のことを言われていましたが、私も最初の頃聞いた時には、それほどの感慨をもたなかったのですが、その後歌いこむにつれて愛着が

生まれ、年がたつにつれて「いい歌だなあ」と思うようになってきました。

磨けば玉になる石のように、芦高の校歌はそれに愛着をもって歌いこむことによって名曲となる、といえるのかも知れません。

ながながと校歌ができるまでの由来を書いてきましたが、ここで君に、そしてすべての芦高の後輩の方に申し上げたいことは、校歌の制定過程を知って校歌に愛着をもって歌ってほしいということです。

今までに見てきましたように、芦高の校歌は、制定の動機はともかくとして、戦後のどん底時代に先生と生徒との共同作業によって民主的に創りあげられたものです。

先生と生徒の代表によって構成された委員会が設けられ、歌詞は、全職員、生徒から公募され、それを全員で投票して最高得票作品を決め、音楽の先生が作曲してでき上ったのです。(現在ならば曲も公募されたでしょうが、当時は音楽教育水準が低く、生徒にはその能力がない時代でした)

これは今はやりの言葉でいえば、正真正銘「学校中で手作りで作った校歌」なのです。

他の学校の例を詳しく調べた訳ではありませんが、私の知る限りでは、たいていの学校では、歌詞は校長先生か国語の先生が作るとしても、作曲は有名な作曲家に委嘱する、時には詞、曲とも何のゆかりもない有名人に委嘱するということで校歌が制定されていることが多いようです。

そして芦高校歌の制定過程との最大の違いは、仮にその学校の先生が作詞、作曲した場合でも、その制定に生徒が関与するということは一切なく、学校の先生方、ひどい場合には校長先生一人で決定していまうということです。

その制定過程は、さながら明治の欽定憲法の如く生徒のあずかり知らぬ間に作られ、或る日突然「これがお前たちの校歌だ。歌いなさい。」と与えるようにして制定されているということです。

そのためでしょうか、甲子園で演奏されている校歌の中には、歌詞が難解な漢語ばかりで、今の高校生にはとても意味がわからないだろうと思われるものがあり、最近の新設校の中にも、明治時代に作られたのではないか、といぶかしむような漢詩のような歌詞の校歌があります。

ここまで書けば、もう私の言わんとするところはわかっていただけると思います。

「春曙の打出浜……」この校歌は芦高の校是「自治、自由、創造」そのままに、敗戦のどん底から、理想の学園を夢見て、当時の先生方と生徒とが、力を出しあって民主的に創(つく)ったものなのです。

生徒の知らぬ間に、知らぬ所で作られて、与えられた校歌ではなくて、先生と生徒とで創り育ててきた「手作りの自分たちの校歌」なのです。

だからこそ、芦高で青春を送り、芦高を卒業した者ならば、折あるごとに自然に大声を出して校歌を歌うことになり、なかでもその制定の契機(きっかけ)を作った私としては、「私がつくったようなものだ」という思い入れをもって、人一倍大声を出して歌うことになるのです。

そのことを最前列にいた君が認めてくれたのは、私にとって大変嬉しいことだったのです。

どうか君をはじめ、すべての芦高の後輩の諸君、芦高の校歌制定の過程を知って、他校の場合とは根本的に違う校歌の本質を理解し、愛着をもって、今後折あるごとに、誇りをもって声高らかに歌って下さい。

また芦高生諸君も、最初は応援団に強制されて、無理矢理憶えさせられるのかも知れませんが、3年間芦高生活の間に、この歌はきっと諸君の「心のふるさと」として大切なものになる筈です。どうか大きな声を出して歌って下さい。

先にも見たように、磨けば光る玉となる石のように、この歌は最初はそうではなくても、歌いこむほどに名曲になるのですから。